御頸を隱し置候へば、奇特なることにて血涌上り、其血にてあらはれ、兄弟ともに、伯母谷と申所にて致討死候、其時神璽をも取かへされ候、扨又二の宮（忠義王）をも、同じ時分に打はたし申候、是は中村彈正御首給はり候へども、是も鄉民起り致討死候、兩宮の間、大山ども隔て道遠く候といへども、赤松衆互に堅く申合、同じ時節に打果し申候、さかれども討手の兵共、大形道にてうたれ、たま〳〵殘るもの、雪にうづもれ果て、神璽を取るべきやうなし、小寺藤兵衞入道大和衆越智と申者をたのみ、種々の謀をめぐらし、鄉民をすかしとり、次の年長祿二年八月晦日、神璽を內裏へ備申候、

〔上月記〕兩宮（尊秀王、忠義王）御頸、并神璽、同時雖奉取、或被討或埋深雪、適殘者迷山野、是故急度不及注進之處、小寺藤兵衞入道大和越智申合、調有樣之注進、小河中務少輔亦同之、

一神璽出現之計略、小寺藤兵衞入道性說罷下和州、小河中務少輔相共廻種々調略、重而奉取返訖、終翌年長祿二年八月晦日、奉成神璽入洛畢、然條々忠節依無比類、如御約諾、加賀半國、并備前國新田莊、伊勢國高宮保等應御成敗云云、（略下）

〔續史愚抄後花園〕長祿二年八月廿八日癸未、近日自南山神璽歸洛事治定、爰可被減改間、裏衣已下、山科中納言顯言爲內藏寮寮務調進之、

〔天地根元歷代圖〕長祿二年八月三十日、神璽入洛、奉入三寶院天神堂、

〔季瓊日錄〕長祿二年九月二日、神璽前月晦日入洛、今晨爲御禮諸老被參也、

〔續神皇正統記後花園〕康正二年、一條東洞院御所より、新造內裏土御門殿に遷幸、其後神璽は、赤松以下の輩が良策にて、吉野の奥より長祿二年內裏に渡御、このたびも明德（後小松）の例を守られ侍るとなり、三種の御事は、以前ところ〳〵にくはしく見え侍る、但寶劍は海底に威をかくし、神鏡は火中に形をあらはす、玉璽のみぞ神代よりすべてさはりもなく儼然と傳り侍る、今におきて